日本ベンチャー大學の挑戦

前篇～若い男性の不甲斐なさに発起～

日本ベンチャー大學 代表取締役
今元 英之 いまもと・ひでゆき

日本ベンチャー大學 理事長代理
山近 義幸 やまちか・よしゆき

私塾「日本ベンチャー大學」説立の経緯は？

「母体に当たるザメディアジョンの新卒採用の人財事業部を立ち上げたのが1990年7月で、有限会社から株式会社に改組した時です」

こう語るのは、設立の中心軸で理事長代行を務める山近義幸氏だ。人材ビジネスとは無縁だったものの、某経済誌グループ企業と提携。「単なる就職斡旋企業ではなく、学生の目線にある会社にしたい」をモットーに旗揚げ。瞬く間に注目を集めた。

「当時は『本気（マジ）会』という飲み会を本拠地の広島・山口でかなり行っていました。その際に『日本ベンチャー大學みたいなものを作りたい』と話したことが、どうやらきっかけになったようです」

と山近氏は屈託がない。

当時、「飲み会」のメンバーの7割が女性。どうも男性が不甲斐ない。積極的な女性陣に対し男性陣は消極的。男は空気が読みにくく「逆ギレ」しがちだと嘆く。男子大学生を「鞄持ち」よろしく出張にお供させても、現地で行方不明になり捜索願いまで出す始末に。2日後に無事見つかったようだが、とにかく心労が絶えない。

「よくよく調べたら、PCやゲームばかりやっているようです。今の教育体制が悪いのもそうですが、とにかく教育現場そのものがおかしい。そこで、まともな教育をしようよ、となったのです」

と、山近氏は原点を振り返るが、

「最初は8～9年前に合資会社という形で日本ベンチャー大学を設立したのですが半年間ほどで閉じました。今度は、知床が世界遺産になった北海道でやろうと試み、現地の人と提携して作ったのですがこれも結局ダメ。今回は3度目。不退転ですよね」

と山近氏。あくまでも楽観的だ。

「外部の99％の方々が応援・協力するといってくれた一方で社内の99％は反対。ですから『これはイケる』と思いましたね。志は日本の再生です。」（山近氏）

若い者がこのようになったのは今の大人の罪。今まで彼らを作り出して来た世の中に大きな問題がある、と説いてやまない。

若者に足りないと感じるものは何か？

「〝A級戦犯的〟に若い彼らに謝罪しなければならないことは、歴史や偉人を教えていないということです。歴史認識とか、右だとか左だとか意識し過ぎで、教えることに遠慮し過ぎています。反面不思議なくらいに経営者は歴史が好きですよね。以前大学生らに対して、歴史の偉人を教えれば何とかなるんじゃないか、という実験を試みたことがあります。すると今までゴロッキのような彼らが変わったのです。そしてお父さんお母さんと5年間も会話をしなかった彼らが、まともに話すように変貌しました。これは非常に大きな変化です。彼らも驚いているでしょうが、われわれも刺激され脂が乗っている状態です」

と、山近氏はその効果に手応えを感じている。今元英之氏を社長として招聘、2009年4月に3度目の〝旗揚げ〟を都内で行った。

「第1期生は23名で。正規の1期生（レギュラー＝大学卒業）は12～13名で授業料は無料です。土・日曜日には10名程度の受講生が参加しますがこれも無料です。気に入った授業がある時はさらに10名程度の現役大学生が聴講生として参加します。昔の寺子屋みたいに誰だか分からないような子がポツポツいますし、無料だと幽霊学生を作ってしまう要因にもなりますが、これは続けます」

と今元氏も熱い。

志士を育てた「松下村塾」が現代に蘇る

運営の原資は63社の会員企業からの協賛金で、これで講師の費用などもやりくりする。資本金2千万円も親会社であるザメディアジョンを含め、応援企業と有志（個人）20名からの出資だ。

「来年は増資を考えています。3千万円の予定で30社から出資してもらうことになっています。ただし実はこの基金、広くは受け付けているわけではなく、ちゃんとセグメントを行っているのです」

と山近氏。

これは大学としての自由度を保持するため、特定の業界や企業に偏ることによる「足かせ」の弊害をなくすための策だ。

若者を何とかしなければ、という「義憤」に駆られての大学設立。かつて吉田松陰が開いた「松下村塾」の再来を目指し、若い人材教育の挑戦が始まった。

（次号へ続く）

生徒を前に板書を交えて熱弁をふるう山近氏

ミーティング形式も取り入れた講義